

現代「かな」づかい考 —なんか、気になったりとかしませんか—

ニュースで流れる「街の人の声」やスポーツ選手へのインタビューで、こんなコメントをよく耳にする。

「〴〵致し方ないのかなと思います」

「〴〵が今後の課題かなと思います」

「致し方ない」「課題だ」と言い切らずに「かな」をつける。親しみのわく言い回しではあるけれど、言い切らずにフニャツとぼかされると、ごまかされているような、あるいは急になれなれしくされたような、妙な心地がする。ここ何年かで、耳にすることが多くなったような気がするけれど、これは一体どういう現象なのだろうか。

というわけで今回は、現代の奇妙な「かな」づかいについて、考えてみたい。

気づいたら、言っている

広辞苑で「かな」をひくと、①不確かな点を確かめる意で自問し、あるいは、相手に問い掛ける語②（「ない」の形で）願望の意を表す、とある。今回問題にする用例は①で、「自問」と「問い掛け」の両方の要素を持っているといえるだろう。

この言い方が気になり始めたのは、冒頭にあげたTVのニュースだけでなく、日常のあらゆる場でよく耳にするようになったからだ。そこには家族や友人との会話だけでなく、職場の会議のような場合も含まれ、上司や同僚が「これは〇〇したほうがいいのかなって思いました」などと言うのを、何とはなし

の違和感をもって聞いていた。

……と、他人事のように言っているが、実は自分も「かな」をよく使ってしまうという自覚がある。例えば、業務の進捗を報告するときに「予定より若干遅れています」が納期には影響ないかなと思いつつ「予定」と言う。このときの心理としては、「予定より遅れている」ということにはだいたい焦りつつも、平気な風を装いたい。かといって「納期には影響ない」と断言したくはないし、悪い印象を与えたくもない。そんな脳内の錯綜が凝縮されて、ふと気づいたら「かな」が口について出ている。そんな感じだ。

ところで、こうした「かな」現象について、世間の人々はどう思っているのだろうか。意識調査のアンケートを実施してみた。

あいまいで自信のない私

アンケートは2021年4月25日から5月23日まで、Twitter上で応募を呼びかける形で実施した。回答数は21件と少なかつたが、一定の傾向を示すものとして結果を公表する。

「〴〵かな」を日常生活においてよく耳にすると感じるか、という問いに対しては、85%の人が「感じる」と答えた。さらに、その人に「〴〵かな」についてどのように感じるか、と聞いたところ、「特に何も感じない」61%、「不快ではないが違和感がある」16%のほか、「その他」として「本人の意見+客観的な意見にして和らげている感じがする」「断言す

ることに非常にプレッシャーを感じる人が増えたのだなと思います」という回答もあった。「不快に感じる」「好ましく感じる」と答えた人はいずれもゼロ。また、自身も「～かな」をよく使う、と答えた人は61%いた。(結果の詳細は下図の通り)

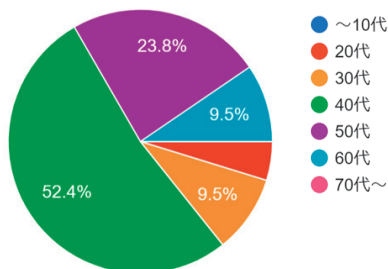
最後の設問で、「～かな」に限らず、話し言葉全般で気になっていることを自由に記述してもらったところ、「～させていただく」が気になる、という回答が3件。また「責任の所在をはっきりさせない、断言することを粗雑と感じる、謙譲語尊敬語丁寧語の区別がなくなっている、の3点は頻繁に感じます」「『～かな』というのは自信のなさの表れだと思います。言い切ると問題が起こった時に自分の責任になるというのが嫌なので」「責任」に言及する回答もあった。そのほか「最後に『知らんけど』を付けられると、本人がその発言に自信がないのか、相手に共感を求めていることをやんわりと示しているのか、わからないときがある」「テレビ解説でも、ふだんの会話中にも『そうですね』が、最初に出てくる。非常にあいまいな言葉で違和感を感じます」など、全体的に曖昧さ、自信のなさを指摘する意見が多数寄せられた。

ちなみに、この最後の設問に自分が答えるなら、「なんか、○○のことかって、わかったりとかしますか」のような言い方が気になる。「とか」「や」「たり」でばかされて、もはや言葉としての実体がないに等しい。パン粉をまぶしすぎて、ほとんど衣の味しか

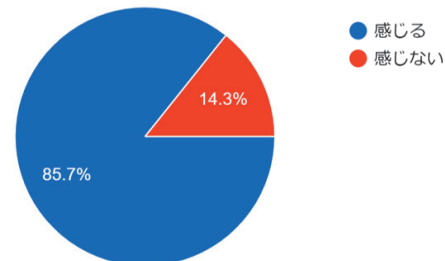
「～かな」に関するアンケート結果

実施期間：2021年4月25日～5月23日 回答総数：21

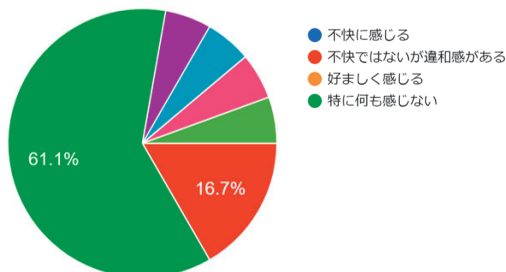
問1. 年齢



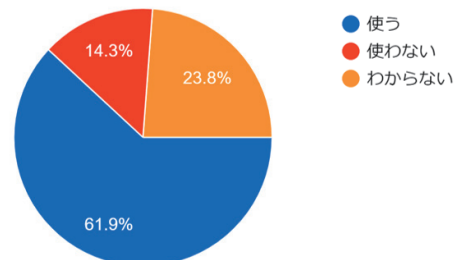
問2. 自身の意見のあとに「～かな」をつける言い回しを、日常生活(テレビ等のメディアも含む)において、よく耳にすると感じますか。



問3. 問2で「感じる」と答えた方は、「～かな」をつける言い回しについて、どのように感じますか。



問4. 自身も「～かな」をつける言い回しをよく使いますか。



※「その他」の意見(一部抜粋)
 ・場面によって、感じ方が違うので、どちらとも言えないです。
 ・断言することに非常にプレッシャーを感じる人が増えたのだなと思います。
 ・普段は何も思わないがビジネスの場合は「～かと思う」と言いかえるようにしている。
 ・本人の意見+客観的な意見にして和らげている感じがする。

何度でも声に出して言いたい辞典②【^{びじょぎ}美女木ジャンクション】埼玉県戸田市美女木にある、東京外環自動車道・首都高速5号池袋線・首都高速埼玉大宮線を接続するジャンクション。濁点の多さのせいか、言い終えたときの爽快感が並ではない。日本道路交通情報センターの人になって、ラジオで「美女木ジャンクション付近3kmの渋滞」などと言ってみたい。

しない揚げ物みたいだ。これもやはり、ストリートに発言するのは怖いから、とりあえずいろいろくつつけてみました、といったところか。

薄めて、なじんで、支配される

ここからは、現代「かな」づかいの背後にあるものについて、さらにつつこんで考えてみたい。

先ほども書いた通り、「かな」には「不確かな点を確かめる意で自問」する意がある。自分なりの考えはあるけれど、それに対する自信や確信はない。また、それを言うことで、誰かの機嫌を損ねて叩かれたくないし、何かまづいことが起きても責任などとなれない。だから、人前に出す前に「これはあくまでも私の推測ですよ、断定してはいませんよ」というエクスキューズを入れて薄めておきたい。そこで「薄め液」の役割を果たしているのが「かな」なのではないか。

しかし、そもそもなぜ薄める必要があるのか。そこで思い当たるのが、この手の話題ではもはやおなじみの、「空気」というものの存在だ。

「空気が読めない」の略語「KY」がユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされたのは2007年。また「付度」が2017年に同賞の大賞を受賞したときは、ほとんどセット扱いで「空気を読む」もメディアによくひっぱり出された。さらに「空気」を読むすぎる女性が主人公の漫画『風のお暇』（コナリミサト、秋田書店）がTVドラマ化され、話題になったのが2019年。こうした動きから、「空気」

は2000年代以降に広く使われ始めたような印象を持っていたが、調べてみると、もともと古くから日本社会の特徴を表す概念として君臨していたようだ。

その代表格が1977年に発表された山本七平『「空気」の研究』（文藝春秋）だろう。著者は、人々が何かの決定を往々にして「空気」に委ねていること、そしてそれが「強力な規範」となって私たちの口を封じるといふ現象が、戦前から戦後に至るまで、変わらず起きていることを指摘する。その現象は、本書の発表から40年以上が経過した今も根本的には変わらない。もっといえば、一層加速していると考ええる。



本書で面白いのは、「空気」支配から脱却するための手段として「水を差す」という概念が提示されていることだ。著者によれば、「水」とは言い換えれば「現実」のことであり、それを連続して差し続け、いわば「雨」をしとしとと降らせ続けることで、「空気」のみによらない「現実」を保っていられる、ということだ。

「水を差す」という言葉には、余計な口を挟む、邪魔をする、勢いを削ぐ、といったニュアンスがあり、マナー上「よくないこと」とされている。しかしこの「マナー」というのも厄介で、相手への思いやりから実行されているものもあれば、意味を失っ

て形骸化しているものや、単に「波風立てたくない」「文句言われたら面倒」というだけで渋々やっているものも少なくない。そう考えると、「かな」も「何となく、断言しないほうがよさそうだから」くらいの感じで、「空気」になじむように自分の言葉を薄めることで、結果的に「空気」支配を補強する役割を果たしているといえるのではないか。

しかし、現実、つまり本心や事実を口にしたくらいで淀むような「空気」など、守る必要があるだろうか。少なくとも私にはない。ならば、天を仰いで乞うてなどいないで、たとえ小降りでも、自ら雨を降らせることだ。目に見えない「空気」に溶け込むよりも、目の前の誰かと真に分かり合うために。

工夫かな、それとも回避かな

「仮名」は7世紀頃、日本語でものを書くための創意工夫の中で、漢字を変化させて生み出されたといわれる。それにならって無理やりまとめれば、現代「かな」づかいは、周りの「空気」をできるだけ良好に保ちながら、しなやかに自己主張をするための「創意工夫」といえるのだろうか。

いや、創意工夫というより、何にでも「※個人の感想です」をつけて炎上を回避するような、パッケージ型の「リスクマネジメント」に近い気がしてならない。みんなでカナカナ鳴きながら、日暮らし、スマホに向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、空気読みつづ書きつくる。そんな風流すぎる時代を、私たちは生きているのかもしれないって思ったりときました。

ひとモジのモノガタリ



編集後記

今回のテーマについて、「字マンガ」のしば太さんが、こんなことを言っていました。

「曖昧な言い方も多いけど、ものすごく断定的な、きつい言葉も多くて、両極端な気がする」

確かにそうです。前号でも触れた「〇〇は正義」のほか「神」「尊い」「〇〇しか勝たん」などは、極端にせよ称賛の意味だからいいとして、「〇〇はクズ」などと根拠も示さずに断定するような物言いが、SNSなどを中心にあふれています。

実生活ではどこまでも曖昧に、匿名のSNSではどこまでも粗暴に、という内面的な分離が起きているのでしょうか。匿名だから言えることでもあります。それがむき出しの刃なら人を傷つけるだけです。正確な事実認識と想像力、そして、それを表現するのにふさわしい言葉こそが、刃を凶器ではなく道具たらしめるのではないのでしょうか。

またお会いしましょう。

藤田 一樹